

# 県内カメ事情



クサガメ（幼体）



ミシシippアカミミガメ（成体）

**5月の連休中**、水田やため池の生きもの調査をしていると、突然、カメが目の前に現れた。野生のカメを素手で捕まえるチャンスは滅多にない。逃げるカメに必死で手を伸ばし、やっと捕まえることができた（写真左）。クサガメの幼体（子ども）だ。クサガメは、我が国では最もよく見かける日本在来種のカメであるが、県内では、県南で多くの生息が確認されている。特に佐野市や岩舟町を流れる三杉川は、その数の多さで有名な。カメが道路を横断するときに車にひかれた「ロードキル」の事例も多く、佐高生の中にも目撃者がいるようだ。

**カメを素手で捕まえる**ことができたのは、かなりの偶然だが、県内で数少ない爬虫類のスペシャリストである中島氏によると、「カニかご」というカニを捕まえる仕掛けをカメがいそうな場所に沈めておき、次の日、引き上げると、おもしろいように捕れる（こともある）そうだ。右下の写真は、県南のある公園の池に仕掛けた「カニかご」の成果で、一度に8匹のクサガメが捕獲されている。この池では、おそらく、人為的に放されたカメ（捨て亀）が繁殖している可能性が高いと思われる。

**捨て亀が横行**するようになったのは、1975年に、「ミドリガメ」からサルモネラ菌が発見されたとマスコミで報じられたことがきっかけである。サルモネラ菌は、土中に普通に生息している菌で、「ミドリガメ」に特有のものではないが、今で言う「風評被害」により、当時、膨大な数のカメが川や池に捨てられたと言われている。「ミドリガメ」というのは、いわゆる商品名で、その多くは「ミシシippアカミミガメ」である（写真右。側頭部の赤い斑紋が特徴。自宅で10年近く飼育している個体。レンガに乗っている。）

**カメは寿命が長く**、甲羅の長さがたった数センチの「ミドリガメ」でも、数十年後には甲羅が30センチ近くまで成長する。今も、ペットとして多数販売されていることから、今後も、飼うのに飽きたり、飼いきれなくなった飼い主により、野外に放たれ続けることが予想される（しかし、これは犯罪行為であり、やめてもらいたい。）

**大きくて食欲も旺盛**なうえ、繁殖力も強いアカミミガメは、クサガメの餌や生息地を奪うなど、生存を脅かす可能性がある。実際、県内でのアカミミガメの目撃例は急増しており、将来「カニかご」にかかるカメはミシシippアカミミガメばかり、という日が来てしまうのかもしれない。



＜カニかごで捕獲されたクサガメ＞